

# 境界下降について

## 非

下降 (nF) のモーラがとなりあうとき、両者の境界部分にピッチの段階的な下降が感じられることがあります。ここにみられるピッチの下降は、語彙的な条件と統語的な条件の組み合わせで生じる音韻的に有意味なもので、教育ローマ字では ` (modifier letter grave accent) で示します。語彙的な条件でキャンセルされる場合は代わりに同じ位置に , (modifier letter low grave accent) を置くことで示します。これらの記号をそれぞれ「上つき境界下降記号」、「下つき境界下降記号」、または両者を区別せずに「境界下降記号」と呼びます。境界下降記号はスペースとともに現れますぐ、大雑把にいって、1. 原則として左側に 2. 右側の語に特有のときは右側に 3. マージナルなものは真ん中に境界下降記号を置きます。また、カンマと同じ位置に生じるときは単に境界下降記号を削除します。筆者：[twitter.com/awesomenewways](https://twitter.com/awesomenewways)

## 境界下降の一般について

### 境界下降とは

発話におけるそれぞれのモーラには非下降 (nF) または下降 (F) の声調が割り当てられますが、nF モーラがとなりあっているとき、その両モーラの境界部分に段階的なピッチ下降が感じられることがあります。このピッチ下降を「境界下降」と呼びます。

境界下降にはいくつかの種類がありますが、教育ローマ字では以下の6種に分類します。

1. 特定の統語的位置に生じるもの（3を含まない）
2. 特定の語の直前に生じるもの

3. 倒置によって生じるもの
4. 語中の AP 境界に生じるもの
5. 省略によって生じるもの
6. 上記のいずれにも当てはまらないもの

いずれについても、境界下降が生じるためには、そこが AP 境界である必要があります。となりあう AP の境界にはかならずスペースがありますが、境界下降記号は、その境界下降が 1 であればスペースの左側に、2 であればスペースの右側に、3 であればスペースをふたつにし、そのあいだに置きます。このときの境界下降記号は、つきの場合を除いて、` (modifier letter grave accent; 上つき境界下降記号) です。

境界下降はその左側の AP のアクセントが条件を満たしていないと生じません。ほかの条件が満たされていて、アクセントの条件が満たされない場合は、境界下降記号を下つき (, (modifier letter low grave accent; 下つき境界下降記号) ) にします。

境界下降記号があるべき位置にカンマがある場合は、境界下降記号は表記しません。言い換えると、カンマと境界下降記号はスペースを挟む場合も含め隣接せず、隣接しそうになった場合はカンマが優先されます。

また、境界下降記号は文頭には表記しません。

## 境界下降の種類

### 特定の統語的位置に生じるもの

nominal の右側が自立語で、左側のアクセントが 1 である場合、境界下降が生じます。

これは最も主要な境界下降であり、ga, wo, ni などの少数の付属語と、なんらかの意味論的ないし談話的な条件によって交代します。従ってこの種の境界下降はこれらの付属語と並列関係にあるものと見ることができます。

nominal の右側が自立語の場合、スペースの左側に境界下降記号を置きます。このとき、左側の AP のアクセントが 1 のときは境界下降が生じるので記号を上につきにします。それ以外のアクセントの場合は境界下降が生じないので下につきにします。

例<sup>1</sup>：

- ・「頭が痛い。」 A'tama ga 'i'ta·i. に対して 「頭痛い。」 Ata'ma `i'ta·i.
- ・「お腹が痛い。」 Onaka' ga 'i'ta·i. に対して 「お腹痛い。」 Onaka', 'i'ta·i.

この場合、同じ位置にカンマが既にある場合は、境界下降記号を削除します。

例：

- ・「日本語、難しい。」 Nihonngo', Muzuka'si'·i.
- ・「人間の言葉、たくさん覚えたい。」 NInngenn,-'no koto'ba, Takusa'nn o'boé ·"ta·i.

## 特定の語の直前に生じるもの

nominal 以外の位置で特定の語が後続するときに規則的に生じる境界下降は、すべてそれらの語に特有のものと見做し、ふだんは境界下降記号をそれらの語の綴りの一部であるものとして扱います。語形を話題にする場合、デフォルトでは境界下降記号は下につけます。

文中においても、境界下降記号はスペースの右側に置きます。

例：

---

<sup>1</sup> この文章で使用しているフォント Inter では、境界下降記号が右寄りになっているので、左にスペースがあるように見えるかもしれません、実際にはスペースは打ち込まれていません。左右にスペースがあるのは倒置の場面です。教材で倒置を扱う場面は少ないでしょうから、Inter でも視認性が問題になることは少ないと考えています。

- ・「私にだけ教えてくれた<sup>2</sup>。」 Watasi'-ni `da'ke osiè't·e kuré't·a.
- ・「あなたにだけ教えてあげた。」 A'nata-ni ,da'ke osiè't·e agé't·a.

,da'ke および、現在見つかっているすべての語<sup>3</sup>について、境界下降は左側の AP のアクセントが 1 であるときに上つきになり、それ以外のときは下つきになります。

## 倒置によって生じるもの

いわゆる倒置の際には、「元の」<sup>4</sup>語順における文末にあたるところで境界下降が生じることがあります。倒置がある場合、「元の」文末の直後に境界下降記号をとき、境界下降記号の両側にスペースを一つずつ置きます。

この種類の境界下降は、直前の AP のアクセントが 0 の場合でも生じる点がほかの種類の境界下降とは異なります。「元の」語順における文末に位置する AP のアクセントが 2 以上の場合は境界下降が生じないので記号を下つきにし、それ以外の場合は上つきにします。

例：

- ・（「私は明日お祭りに行く」という意味で）「明日お祭り行く私」 As'i'ta Omaturi ' , i'ku ` watasi'
- ・（「私は明日は仕事だ」という意味で）「明日仕事私」 As'i'ta Sigoto' ` watasi'

---

<sup>2</sup> これを書いているときに気づいたことですが、この場合「だけ」の後にさらに境界下降があっても違和感がありません（内省。2021/06/15）。一方「あなたにだけ」の場合は境界下降を入れることができません。「だけ」の冒頭に境界下降があるときは終端にオプショナルな境界下降があるのかもしれません、現状では表記しません。

<sup>3</sup> 余計なことを書いて間違いがあるといけないので例示にとどめますが、,da'ke のほか、, 'bakari, ,mitai, および「だろうから」,da'roukara などの「だろう」「でしょう」系列の複数の語があります。

<sup>4</sup> 「倒置」の定義や「元の」語順を確定する手続きは教育ローマ字の規則の中にはないので、現状は常識で判断するしかありません。

倒置の境界の部分にカンマがある場合は、境界下降記号は挿入しません。カンマの後の大文字化の規則も同時に適用されます。

例：

- （「私は明日お祭りに行く」という意味で） 「明日お祭り行く、私。」 Asi'ta Omaturi', i'ku, Watasi'.
- （「私は明日は仕事だ」という意味で） 「明日仕事、私。」 Asi'ta Sigoto', Watasi'

疑問のイントネーションがある文が倒置を起こしている場合は、疑問のイントネーションによる上昇の直後にピッチ下降があり、分類上は直前のモーラが F であるにもかかわらず境界下降様になります。

この場合は、アクセントにかかわらず上つき境界下降記号をつけます。また、イントネーションを示す記号が分節音の上についている場合は、その記号はつけたままにします。ただし、このような場合は、境界下降記号が入る位置に読点があるのが通常です。その場合は他の種類の境界下降の場合と同様、カンマのみを表記し、境界下降記号は表記しません。また、カンマの直後のスペースは一つだけです。疑問文の倒置では疑問符もいっしょに倒置されることがよくありますが、その場合は2文に分けて書かれているものと考え、やはり境界下降記号は表記しません。疑問符は文末扱いになるため、後続するスペースは通常通り2つになります。

## 語中の AP 境界に生じるもの

「男一匹」 oto'ko `ixtupi'ki や「指揮する」 si'ki `su'ru など、必ずしも語境界を設定できないかもしれない部分の AP 境界に境界下降があるときは、上つき境界下降記号をスペースの左側に置きます。下つき境界下降記号は用いません。

なお、語中に境界下降があると考えられる場合は、原則として直前の AP のアクセントは 1 であるとみなします。

## 省略によって生じるもの

かなりマージナルなものですぐ、ほとんど義務的な付属語や語尾の類を偶発的に省略する場合、境界下降が生じる傾向があります。例えば、「お母さんが知らない男に殺された」の「に」を省略することは通常できませんが、無理して抜いて「お母さんが知らない男殺された」（「男」と「殺された」の間に IP 境界を入れずに）と発音してみると、境界下降が生じる傾向にあります。

この規則が必要になるケースはほとんどないでしょうが、この場合は倒置による場合と同様、前後にスペースを入れます。

なお、この規則はマージナルあるいは偶発的なケースについて定めているものです。 nominal の直後で wo と が交代するケースのように、非常に生産的かつ規則的に分節音が現れなくなる場合についても「省略」と呼ばれる場合がありますが、 nominal であれば境界下降記号の左側にはスペースを入れないので注意してください。

## これ以外の境界下降

これ以外の境界下降は原則として表記しませんが、義務的なものについては将来の改定で規則に組み入れられる必要があります。

現在、特別に規則を定めているものとして「つぎ」があります。「つぎ」はその末尾が nominal でなさそうな場合であっても、直後に自立語が続くと義務的に境界下降を伴います。このため、「つぎ」に限っては、その末尾が nominal であるか否かにかかわらず、自立語が後続するときはスペースの左側に上つき境界下降記号を置きます。

例：

- ・ 「つぎわたしの番ね。」 Tu'gi `WatasI,-'no 'bann 'Ne.
- ・ 「つぎ来るときは忘れないでください。」 Tu'gi `'kuru 'tokI h̄à Wasu,'rè·'naide kuda'sai.

# 直前に IP 境界がある場合

直前に IP 境界があるか否かは、境界下降記号の有無や上下には影響しません。IP 境界があると境界下降の有無を聞き取りや内省によって判定することが難しくなる場合もありますが、その場合は同一条件で IP 境界がない場合を考えて判断してください。ただし、実際には純粋に音声によって判断しなければならない場合は少ないのでしょう。

## 覚え方

- 基本は左側です
- 右側の語に特有の場合は、右側に寄せます
- 不規則でめちゃくちゃなものについては、真ん中にします
- カンマは境界下降記号を食べます